

主 題：『一粒の麦』

聖書箇所：ヨハネの福音書 12 章 20-26 節（新約 p. 187）

皆さんの中のある人は「これが正しい」、「こうすべきだ！」と分かっているにもかかわらずできなかった、という経験をお持ちだと思います。例えば、ご近所の誰かにイエス様のことを証ししようとしたけども、勇気がなくてできなかったとか、あることのために祈り続けてきて、本当はもっと祈り続けるべきなのだが、そうできなかったとか。なすべき正しいことが分かっているにもかかわらずできない。そのような経験は、誰であっても多かれ少なかれ持っているものだと思います。一体何故、私たちはそれができないのでしょうか？その原因は私たちの内にある弱さです。神様を恐れずに、つい人を恐れてしまう。神様だけを信頼すべきなのにそれをせずに、神様以外のものに頼ってしまう。言い換えればそれは「罪」です。神様に対する不信仰です。

☆私たちは、どうすれば罪に勝利して神様に従うことができるのか？

1. 忍耐して神の時を待つ（20-23 節）

◎23 節の『その時が来ました』という表現にご注目ください。それまでのイエス様の表現は「その時はまだである」でした。ヨハネは、イエスがずっと、「その時はまだである」とおっしゃっておられたことを教えています。カナの婚礼においてブドウ酒が尽きたことを知らせにきた母マリヤに向かって（ヨハネ 2:4）、また仮庵の祭りに出かけて弟子たちに自分のわざをあらわすことを提案した兄弟たちに向かって（7:6, 8）言われたことばは、「わたしの時はまだ来ていません。」でした。そしてイエスの教えに憤慨した人たちが、イエスを捕らえることができなかった理由として語られたのが「イエスの時が…まだ来ていなかったから」（7:30, 8:20）でした。

一体、イエス様は、何を、どのような時をお待ちになっておられたのでしょうか？そのことを知るために、少し前の箇所をご覧ください。12:12 以下です。群衆が熱狂してイエスを迎えました。その時に、彼らは『しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。』とあります。これは別名では「なつめやし」のことで、エルサレム近郊には生えていない植物なのです。ということは、彼らはたまたまその辺りに生えていた木の枝を取って来て、それを手に持っていたのではないのです。それは、ある歴史的な出来事と関係しています。

紀元前 2 世紀、イスラエル人たちはシリアの支配下にありました。そして、特にアンティオコス 4 世という王が統治していた時、彼らは大変な迫害を受けました。聖書という聖書は焼き払われ、割礼は禁じられ、エルサレムの神殿は偶像の宮にされました。彼らはそこで、豚を犠牲として捧げることも強要されました。それに抵抗した多くの人々が殉教の死を遂げました。そんな状況のもと、ついにシリアに対する反乱が起きたのです。それを指導したのは、ハスモン家という祭司の一族でした。やがて、その内の一人、ユダ・マカバイオス家の人物が率いる一軍がシリアを破り、エルサレム神殿の奪回に成功します。その時のことが、旧約聖書の外典のマカバイ記（10:7）で、このように記されています。『彼らは、テルソス、実をつけた枝、更にはしゅろの葉をかざし、御座の清めにまで導いてくださったお方に賛美の歌をささげた。』

その後、イスラエルは再び神殿を失うのですが、今度は先程のマカバイオスの兄（シモン・マカバイオス）が神殿を取り返すのに成功します。その時にも、このように書かれています。『シモンとその民は、歓喜に満ちてしゅろの枝をかざし、豎琴、シンバル、十二絃を鳴らし、賛美の歌をうたいつつ要塞に入った。イスラエルから大敵が根絶されたからである。』（マカバイ記 13:51）。

さて、このように、しゅろの枝、なつめやしの枝というものは、イスラエルの民にとって、民族独立と解放の記憶と深く結びついていたのです。しかし、その独立は長くは続きませんでした。その 2 度目のエルサレム奪回後、わずか 100 年足らずで、再びイスラエルは大国の支配下に落ちてしまったのです。それが、当時のローマ帝国です。主イエスの時代、未だローマの支配下にあるイスラエル人たちがしゅろ木の枝を持って、主イエスをエルサレムに迎え入れました。あの独立と解放の象徴であるしゅろの木を振りながら。これが何を意味するのか、もうお気づきですね。

そうです。彼らはマカバイオス家の兄弟のような、解放者を求めていたのです。それが彼らのメシヤ待

望と一緒にあって、熱狂を生み出していたのです。彼らにとってメシヤとは力をもって独立と解放を勝ち取ってくれる王であるはずでした。このイエスという方にはそれだけの力があると彼らは信じていたのです。何故なら、彼らは奇蹟を見、またその噂を聞いたからです。

ヨハネ 12：17, 18『イエスがラザロを墓から呼び出し、死人の中からよみがえらせたときにイエスといっしょにいた大ぜいの人々は、そのことのあかしをした。そのために群衆もイエスを出迎えた。イエスがこれらのしるしを行なわれたことを聞いたからである。』

しかし、このようにイエスを政治的な解放者としての王としようとする動きは、ここにおいて初めて起こった訳ではありませんでした。ヨハネは6：15で、「5000人の給食」のあと、群衆がイエスを無理矢理、王にしようとしたことが書かれています。群衆の求めるものと、主イエスが与えようとしているものは、決定的に違っていました。悲しいことに、それが十字架までずっと続くのです。イエスが与えようとしておられたのは、ただ、一民族の政治的な独立ではなく、私やあなたを含むすべての人の、全ての民族の、永遠の救いだったのです！

そして、今日の聖書の個所で、そのことが象徴的に明らかにされる出来事が起こったのです。イエス様のもとに、異邦人である何人かのギリシヤ人が来たのです。彼らはピリポに頼みました。『先生。イエスにお目にかかりたいのですが。』（12：21）。これは、重大な時を知らせる出来事でした。ここで、初めてイエスは「時が来た」と言われるのです。それは、イエスがこの地上に来られた本当の目的、つまり多くの人の罪を背負って十字架で死ぬ、その時がいよいよ来たことを知らせる出来事だったのです。イスラエルのためだけではなく、当時、異邦人の代表的存在であったギリシヤ人を含む全ての人の罪のために。

◎20節の『祭り』とは、何の祭りのことでしょうか？これはイスラエル3大祭りのひとつ、『過越の祭り』のことなのです（参照12：1）。実はこの時、イエスの十字架まであと1週間をきるという時期になっていました。イエス様が十字架にかかれるのは、いつでも良かったのでしょうか？そうではないです。1コリント5：7には、イエスが「過越の小羊キリストが、…」とありますが、これは祭りの時に殺される1歳の雄の子羊かやぎのその血を門柱とかもいにとということが教えられています。イエスは、過越の祭りの時に、十字架にかかる必要があったのです。また、イエスが十字架にかかる時は、実はダニエル書の9章（70週預言）にも預言されているのです。何とこれらの出来事の600年も前から、このことが神によって預言されているのです。

これらのことから、何を私たちは学ぶ必要があるのでしょうか？

「すべてのことには、神のお定めになった時があるのだ！」ということです。イエスは過越の子羊であったが故に、イエス様が十字架にかかるのは、この過越の時である必要があったのです。私たちはどうでしょうか？神の時を待たずして、「神様、早くしてください！」と祈る時がうおくあるのではないのでしょうか？イエス様はずっと弟子たちに教えてこられました。「神の定めたもう時があるのだから、それを待ちなさい」と。私たちは、この神様のお定めになった時こそが最善であることを知っています。神様は無駄なことをされません。私たちの願いで、神の計画が狂うなどということは有り得ないのです。神の子であられたイエスでさえ、その時をただひたすら待たれたのです！1年前でもいけない。1年後でもいけない。1日違うだけでも。はるか何百年も前から、この時は定められ、預言されていたのです。

◎神の「時」を待てなかった人物 アブラハム、あるいはモーセ…。アブラハムについては、彼に与えられた約束は、創世記12章、15章などに見られますが、順を追って見ると、明らかに、神はアブラハムの正妻であるサラとの間に、子どもを与えようとしておられました。しかし、アブラハム（サラも）は、それを待てなかったのです。だから、女奴隷ハガルとの間にイシュマエルをつくり、それによって、様々な問題が起きました。また、モーセは彼も、自分の力でイスラエルの民を、エジプトの地から脱出させようと考えたのではないかと考えられます。しかし、神の時、神の訓練がありました。

2. その後の結果を考える。(24-25節)

ここで、イエス様は大切な大切なことを教えようとしてくださっております。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。』という言い回しは、重要なことを教えようとする時のイエス様独特の表現です

(ヨハネの福音書に25回)。

イエスは、その時を指して『栄光を受けるその時が来ました』と言われました。しかし、この言葉の真意はなかなか理解し難かったと思います。ある意味では、この言葉こそ、まさに群衆も弟子たちも求めていた言葉だったからです。そうです！ついに王となる時が来た。そのように弟子たちや多くの人々は聞いたかも知れません。しかし、その次にまったく予想もしていなかった言葉が続いたのです。『一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。』(24節)と。

地に落ちて死ぬということは、実に惨めなことです。栄光を受けることと、地に落ちて死ぬことは正反対です。しかし、そのまさに正反対の言葉の中に主イエスの真意がありました。主イエスにとって、栄光を受けるとは、この地上で王となってあがめられることではありませんでした。そうではなくて、一粒の麦として地に落ちて死ぬことだったのです。自分が死ぬべきこと、しかも十字架の上で惨めに死ぬべきことを語っておられるのです。そうして初めて実を結ぶ_イエス様はそのような十字架の出来事を「栄光」と呼ばれたのでした。それは、すべての人の救いをもたらすために、そのような実を結ぶために、これは避けられないことだったのです。当時の人たちは、目先のことだけを考えて、イエスが地上の王となられ、自分たちを養い、守ってくれることを期待しました。しかし、そこに地上の王国はあっても救いはありません。私たちの永遠は？イエス様は、「先」を選ばれたのです。！

また、ここの言葉はイエス様に関するだけでなく、私たちに関することでもあります。

25節『自分のいのちを愛する』とは、この世における自分の命や栄誉、財宝、時間、関心を第一にして、それに最大の関心を払い、それを最優先するということです。25節『この世でそのいのちを憎む者』とは、イスラエ尔的な表現で対比を表し、「それほどは愛さない」とか、「偏愛しない」という意味(ローマ9:13・マラキ1:2-3)です。私たちが自分中心になっている時は、目先しか見えていない時が往々にしてあるのです。しかし、クリスチャンはそうであってはならないのです。自分の思いや願い、計画以上に優れたものがあるのです。それは神様のみこころです！

真に救われたクリスチャンは、自分を何よりも優先するのではなく、神を、そして、他の人を優先します。私たちは、神様が全てを導いてくださっていることを知っているのです。今、様々なことが(人間的に)順調に進むよりも、神様のみこころがなされて、ある時は、苦しむことの方が必要なこともあるのではないのでしょうか？

3. 天での報いを覚える。(26節)

ここで、イエス様はクリスチャンの報いについて、教えてください。イエス様は、決して報いを望む心が卑しいとはおっしゃいませんでした。ひょっとしたら、神様は人間の弱さのために、天での報いを励みとするために、このような約束を与えてくださったのかも知れません。確かに、イエス様は、この世における報い(=富、健康)と天での報いの両方は受けられないと言われた(マタイ6:1-4)。私たちが、戴けるのはその、どちらかです。

当時、この話を聞いていた彼らの周りには、麦があと1ヶ月ほどで収穫できるような状況で実っていました。当時の人たちにとって、麦というのはどこにでもある視覚教材だったのです。その撒かれた種(麦)ですが、必ずしも実を結ぶとはかぎりません。原語でも、ここは仮定の形で書かれています。どの種が実を結ぶことになるのかも私たちにはわかりません。同様に、私たちのなしたことも、すべてが大きな実を結び成功するとは限らない。いやむしろ、そういったことにならないことの方が多いのかもしれない。しかし、実を結べば、それが初めはどのように小さなことであろうとも、すばらしい神の祝福(神の答え)があるのです。

この場面、「イエスにお目にかかりたい」とギリシャ人たちから頼まれたピリポはアンデレに話し、アンデレとピリポはイエスに話しました。私たちも神様のための種まきを学び、実行してゆくことです。私たちは日々の問題にどのように立ち向かっていくのでしょうか？様々な誘惑があった時、神の最善の時を待つのか？自分の時をぎり押すのか？その後の結果をよく考え、行動するのか？それとも、天での報いを覚えるのか？それとも？ 私たちがするのは、神の最善の時を信じて祈り求めてゆくことです。そして、忍耐も学んでゆくのです。自分の行動をよく考え、吟味しつつ行なってゆくことです。マタイ25:21, 23にあるとおり、「わずかなものに忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。」と、神に喜ばれる選択には神からの祝福が与えられるのです。